

未評価出土文化財をめぐる 博物館資料学の実践研究(2)

— 縄文文化解体期の南四国域における粗製深鉢群の再検証（前篇） —

幸 泉 満 夫

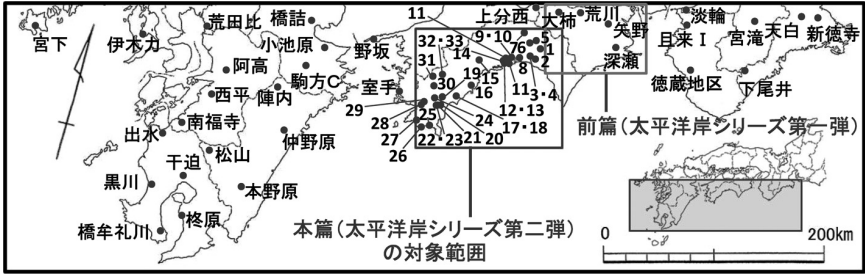
1. はじめに

筆者は、本誌紀要第45・46号において拙稿「未評価出土文化財をめぐる博物館資料学の実践研究(1)」を発表し、以降、シリーズ共通の実践研究課題として、次頁第1図に掲げる太平洋岸各地を対象に、各エリア毎に縄文後晩期土器の検討を進めるという方針を固めた（幸泉2018b・2019a、以下第一弾：東南四国篇）。本稿は、その続篇を意図して綴るものである。今回は南四国、高知県域を実践エリアとする（以下、シリーズ第二弾：南四国篇）。

このエリアもまた、これまでに縄文後晩期に関する膨大な土器資料群が蓄積されている。既に先学による成果の数々から、地域色究明を射程に据えた数多くの地方型式が提唱されており、四国地方では群を抜いた存在といえよう。しかしながら、それらの大半は未だ厳格な意味での定義付けを欠いており、将来的な課題とされてきた部分が多い。いま、これらを本格的に議論、再検証しようとするならば、器種組成や、文様系統上のバリエーションに対する再度の定義付けを含め、公平、かつ統一的視座から内容を整理していく姿勢が考古学的にも、博物館資料学的にも不可欠といえることだろう。

本篇では、これまで継続課題とされてきた無文系深鉢の抽出、検討に加えて、有文精製土器とのセット関係にも注目してみたい。また論の展開上、従来より未評価に近い有文粗製土器群（特に深鉢）も併せて整理し、検証を加えるものとする。

なお紙幅の都合、本稿はシリーズ第二弾の前篇とし、対象時期を Stage12、後期中葉の広瀬上層式段階までとした。



第1図 南四国と太平洋岸ベルト地帯の主要遺跡

1 美良布, 2 庭瀬, 3 新改小山田, 4 林田シタノヂ, 5 栄エ田, 6 奥谷南, 7 松ノ木, 8 田村, 9 鴨部, 10 柳田, 11 居徳, 12 上ノ村, 13 倉岡, 14 北高田, 15 姫野々上町, 16 根々崎五反地, 17 仕出原, 18 川口, 19 三里, 20 中村, 21 入田, 22 国見, 23 船戸, 24 ツグロ橋下, 25 下益野, 26 片粕, 27 尻貝, 28 宿毛, 29 ノ宮, 30 ヲキシウジ, 31 大宮宮崎, 32 庭瀬, 33 十川駄場崎

2. 南四国域に関する学史抄

高知県域における研究は、西南四国側の宿毛貝塚や中村貝塚、入田遺跡出土土器群に対する評価からはじまった。本格的には1960年代における岡本健児（以下、敬称略）等による宿毛式や、中村Ⅰ・Ⅱ式前後の型式設定を嚆矢としよう（岡本1966ほか）。なかでも1960年代後半に相次いで企画された『高知県の考古学』と『高知県史考古編』編纂の意義は大きく、岡本はこれらを契機に、在地土器型式のみから成る南四国独自の土器編年網構築を一通り成し遂げたのである（岡本1966a・1968p16）。

1970年代以降も土佐清水市片粕遺跡（岡本ほか編1975）や四万十市（旧中村市）ツグロ橋下遺跡（木村1987年ほか）等で成果が追加された。このことで、既知の九州鐘崎系土器群との関係や、後続の片粕式や庭瀬上層式の認識が、さらに晩期でも、中村Ⅰ式→中村Ⅱ式→有岡Ⅱ式の変遷が層位的に検証されたのである（岡本1968ほか）。

以上は、後継の木村剛朗へと発展的に継承され、その成果は、1987年の『四万十川流域の縄文文化研究』、さらには1995年発刊の『四国西南沿海部の先史文化』という重厚な二冊の著書として、結実する（木村1987・1995ほか）。

一方相前後して、南四国でも、県央域を中心に公共工事に伴う緊急発掘が拡大しはじめる。初期では、1979年以降の高知空港拡張工事に伴った田村遺跡群（森田ほか編1986）の調査が代表的である。さらに1990年代以降では本山町松ノ木遺跡（出原編1992・前田編2000ほか）で後期前葉の膨大な資料が得られたことが特筆される。

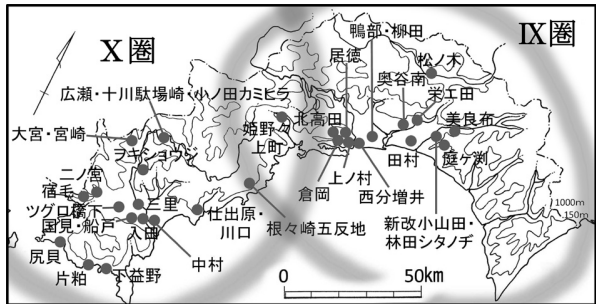
1990年代も後半に移ると、道路開発の西漸化に伴い、次第に西方エリアでの新成果が相次ぐようになる。結果、四万十市船戸遺跡（松田編1996）や大宮・宮崎遺跡（木村編1999・2000ほか）では、後期後半に関する纏まった成果が加わった。さらに2000

年代には、土佐市居徳遺跡群（佐竹ほか編2003、曾我編2004abほか）等、これまで、実態が不明瞭であった縄文晩期以降の新資料が膨大に蓄積されるようになったのである。以降、南四国の考古学界では、この縄文晩期が、新たな地域研究上の関心事として広く注目を集めていくこととなる。

このように岡本、木村について1990年代以降も出原恵三、前田光雄、曾我貴行といった優れた縄文研究者達が次々と現れたことで、地域編年、ならびに土器型式の独自性追求といった側面において、四国地方における該期土器研究の一端をリードしてきたのである。なかでも出原は1992年の松ノ木式設定を皮切りに、高知県中央部（高知平野～吉野川上流域）における後期前半の通史的な編年を構築するなど、地域編年の基軸となる多くの

成果を残してきた（出原1992・1993）。行政発掘の主体が晩期へと移行した2000年代以降も、土佐市上ノ村遺跡（出原編2011）出土の無刻目突帯文にいち早く注目し、新たに「上ノ村Ⅰ・Ⅱ式」を設定して一定の評価を加えている（出原2014）。

ここで出原は高知県内部に二つの小地域が併存するという基本理念に基づき、上ノ村Ⅰ・Ⅱ式中ノ村Ⅰ・Ⅱ式の関係を結び付けているのだが、このような捉え方は、別途筆者が指摘してきた底部研究の成果とも一部通ずるものがある（第2図；幸泉2002ほか）。諸処の土器型式の成立や系譜、地域間関係を論じていくうえで、こうした小地域の



第2図 底部に基づく南四国域の小地域圏の認識
（幸泉2002p59を基図に、遺跡名を加筆）

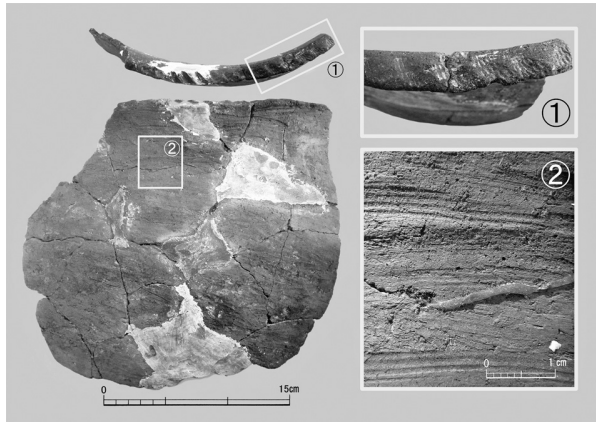


写真1 木村が提示した三里式粗製土器
（三里遺跡出土／四万十市蔵／筆者撮影）

認識は、今後とも重要な基盤的視座となり続けることだろう。

† † † † † † † †

このように後晩期土器研究が盛んな南四国域ではあるが、当該エリアもまた周辺地域と同様、無文系を中心とした粗製深鉢群を、通史的視座から扱った論考は極めて少ない。

統一区分	時期(縄文時代)	南四国の主な型式	前回・東南四国との対応
Stage1	中期後葉	里木Ⅱ・Ⅲ(新)	里木Ⅱ・Ⅲ(新)
Stage2	中期末葉	大柿類型・矢部奥田併	大柿類型・北白川C(新)
Stage3	後期初頭(古)	中津Ⅰ	中津Ⅰ(最古)～(新)
Stage4	後期初頭(新)	中津Ⅱ	中津Ⅱ
Stage5	後期前葉(1)	宿毛(古)	福田K2(古)
Stage6	後期前葉(2)	宿毛(中)	福田K2(中)
Stage7	後期前葉(3)	宿毛(新)	福田K2(新)
Stage8	後期前葉(4)	松ノ木(古)～(新)	松ノ木(古)～(新)併
Stage9	後期前葉(5)	津雲A1～2併	津雲A1～2
Stage10	後期前葉(6)	津雲A3～4併 小池原上併	津雲A3～4 彦崎K1成立～(古)
Stage11	後期前葉(7)	鐘崎Ⅱ併	彦崎K1(中)～(新)
Stage12	後期中葉(古)	鐘崎Ⅲ併 四元併～片粕～広瀬上層	彦崎K1崩壊期 津島岡大25a層～四元
Stage13	後期中葉(中)	西平併(古)	彦崎K2(古)
Stage14	後期中葉(新)	船戸K1～船戸K2	彦崎K2(新)
Stage15	後期後葉(古)	三万田併	元住吉Ⅱ併
Stage16	後期後葉(中)	宮滝1併	宮滝1併
Stage17	後期後葉(新)	宮滝2併	宮滝2併
Stage18	後期末葉(古)	上ノ村1・(姫野々上町古)	滋賀里Ⅰ併
Stage19	後期末葉(新) ～晩期初頭	上ノ村2・中村Ⅰ-1	滋賀里Ⅱ併
Stage20	晩期前葉	八反坪・中村Ⅰ-2	稲持(古)～秋篠併
Stage21	晩期後半(古)	(居徳SR2)・中村Ⅰ-3	篠原(古)併
Stage22	晩期後半(中)	中村Ⅰ-4	篠原(中)併
Stage23	晩期後半(新)	(居徳5A区古)	谷尻併・篠原(新)併
Stage24	晩期後葉 (突帯文出現期)	(居徳4D区古)	前池併・鬼塚併
Stage25	晩期後葉 (弥生早期)	中村Ⅱ(古)	(津島岡大23次河道2)併
Stage26	晩期後葉 (弥生早期)	中村Ⅱ(新)	津島岡大併・船橋併
Stage27	晩期後葉 (弥生早期)	入田B(古)	(百間川)沢田併・宮ノ下併

第3図 時期設定

今一度、関連学史を振り返るならば、1984年、木村剛朗が四万十市三里遺跡出土の無文系粗製深鉢群を取り上げたのがその初見といえるだろう(木村1984)。けれども、当時はまだ対比すべき良好な資料を欠いており、例えば口唇部に刻目を付すタイプ(写真1;後節第8図1～7等参照)は瀬戸内の「彦崎K1式に通ずる」と解釈されるなど、三里式をめぐる編年指標の一つとして捉えられる程度に留まっていた(木村1984p135)。

その後、1990年には出原恵三により西分増井遺跡の報告書が刊行される。氏は、ここで北白川上層式3期併行前後に関する精緻な個体数調査を実施したうえで、出土資料群

の、西日本内部における編年的位置を明らかにするという画期的論法を採用する（出原編1990p80-85）。さらに、1993年刊行の松ノ木遺跡第Ⅰ次における報告書考察編で松ノ木式を設定するにあたっては、より細やかで、適確な属性指標を複数設けるとともに、出土土器全点の個体数識別調査を実施し、その成果を遍く提示してみせたのである（出原編1992p71-80）。ちなみに無文系については、「粗製深鉢356点、組成比44.9%」という数値が示されている。当時は破片部位を選別しない悉皆的調査が成されたため、現在、相応の修正を要するだろう（p136の第1表参照）。とはいえ、当時の発掘報告書では稀有といえる「無文系粗製深鉢」や「底部」に至るまで、客観的な個体数調査成果をベースに論述しようとする姿勢は学史上、高く評価されねばならない。またこうした姿勢はその後、出原自身が提唱、考察を加えた後期末～晩期前葉の上ノ村Ⅰ・Ⅱ式設定の際にもある程度貫かれており（出原編2011・2014）、学ぶべき点が多いのである。恐らく、こうした出原論法の背景基盤として、長年、西日本の弥生土器研究で培われてきたノウハウが潜在していたのであろう¹⁾。

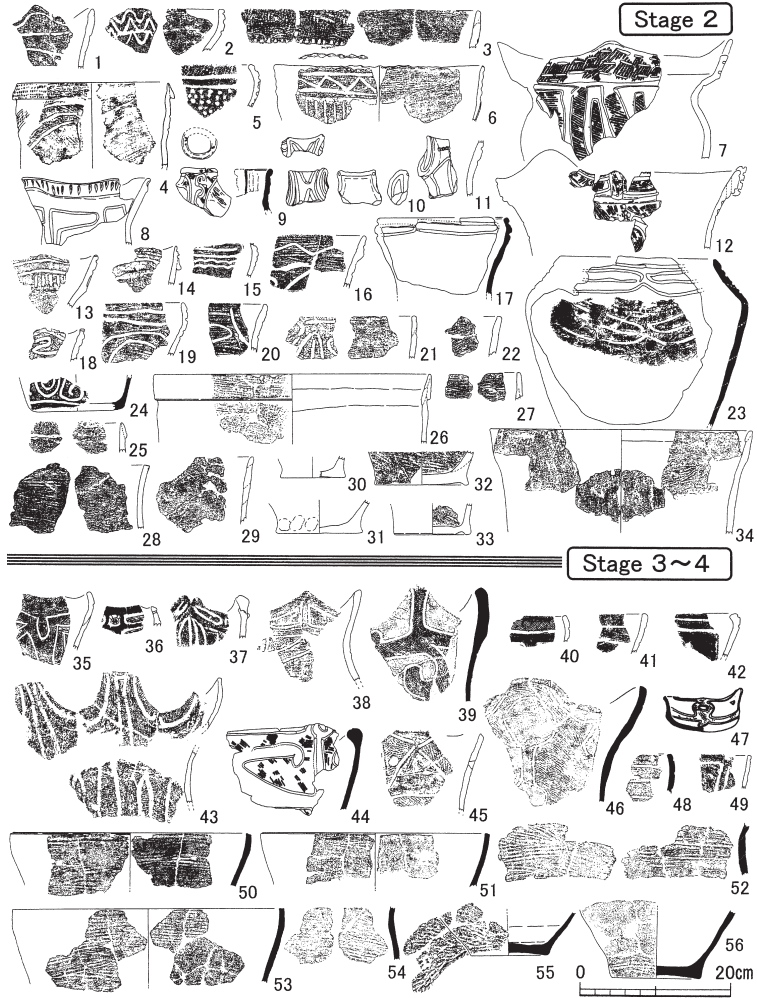
以下、本篇では、2017年発表の日本海シリーズ第一弾で示した分類基準を踏襲しつつ、南四国域における Stage 1～27（28）各期の文様系統組成の変遷を整理し（第3図）、未評価の無文系、および在地系土器資料群に対する検討を深めていきたい。

3. 南四国域の検証（前篇） — Stage 2～12—

(1) 中期末葉～後期初頭；Stage 2～4の様相

後期初頭以前については、未だ、良好な一括資料には恵まれない。1983年、木村は該期前後の遺跡を悉皆調査したが（木村1983p132-138）、そこから導出された分布図には、今日でいうところの Stage 2～4段階までが混在しており、正確さを欠く。もっとも、木村は既に中期末の文様系統組成が単純ならざることを看破しており、「磨消縄文のよく発達したものを主体とし、無文地に沈線文だけで文様を描くもの、また条痕・無文のものなどで構成」されると論じた点は、今も高く評価されよう（木村1983p132）。

この1980年代当時はまだ、宿毛市宿毛貝塚（岡本ほか1951、宿毛市1977、山本・廣田編1986ほか）の他では、四万十町（旧窪川町）仕出原遺跡（岡本1968ほか）、土佐清水市下益野遺跡（岡本1968ほか）、片粕遺跡、津野町（旧葉山村）新土居遺跡（岡本・木村1976）や永野遺跡（岡本・木村1978）出土の断片的な資料しか周知されていなかった。しかしその後、四万十市駄場崎（B地区）遺跡（木村1987）、香美市林田シタノヂ遺跡（山崎編1993）、本山町松ノ木遺跡Ⅲ次 SX6ほか（前田・吉成編1993）、南国市栄エ田遺跡（松村編1995）、奥谷南遺跡Ⅲ区 J1-3包含層（松村ほか編1999）、



第4図 南四国域における Stage 2~4 の様相

(1・6・8・10・11・13・14・18・21・22・25~34南州市奥谷南Ⅲ区JⅠ~Ⅲ包、2・3田村H3区包、4・24土佐清水市片粕、5・7・12・15・16・19・20・35~37・40・41・49本山町松ノ木Ⅲ次包、9松ノ木Ⅱ次SX1、17・23香美市林田シタノヂ、38・43・45四万十市駄場崎(B)、39・44・46・48・50~56高知市柳田、42宿毛市宿毛、47土佐清水市下益野出土)

田村遺跡群 H3 区 (吉成編2004) 等の比較的良好な資料群が順次知られるようになり、今日に至る。もっとも Stage 1～4 各期のセット関係を詳述することは未だ困難である。

第 4 図上段は、奥谷南遺跡Ⅲ区 J1～J3 包含層資料を中心に、Stage 2 段階の代表例を纏めたものである。深鉢の文様系統では、関西由来の北白川 C 式を純粹に伝える例は少なく (第 4 図 9～12・24)、有文精製深鉢では、中部瀬戸内の旧児島湾周辺域を中心に

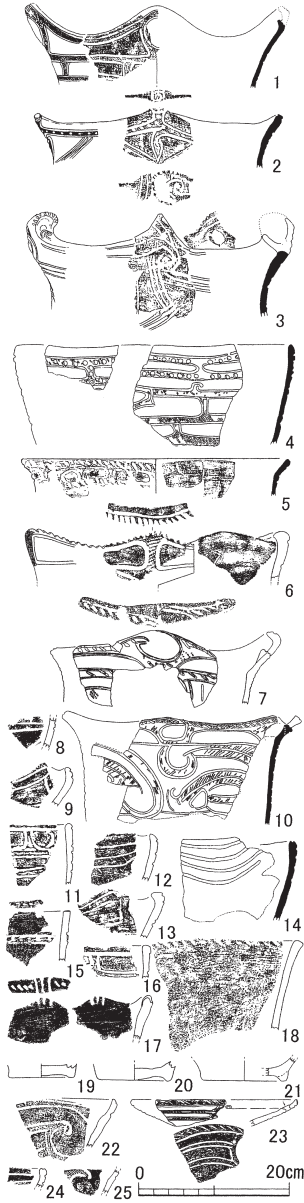
狭い範囲で展開する矢部奥田類型 (第 4 図 3～8 等) や、西部瀬戸内側に多い大柿類型 (第 4 図 1・2 等) が目立つ傾向にある (幸泉2008b)。そして、優位を占めるのが、粗製の沈線文系統である (写真 2)。奥谷南遺跡Ⅲ区では全深鉢中の 29% までを占める (第 4 図 13～21・23)。沈線文系統に関しては、かつて木村が「詳細は明らかでない」と結んでいたが (木村1983p134)、その文様構成や個別意匠から中期在来の里木Ⅱ・Ⅲ式を淵源としていることは自明であり、磨消縄文系統の伝播とともに、一時的ながらも、両者の作り分け意識が加速化したものと捉えられよう (幸泉2001・2008ab・2010ほか)。

無文系深鉢は、Stage 2 主体の奥谷南遺跡Ⅲ区において 43% を占めている。前篇と同様、無文系増加に至る兆候である。ただし、当該資料群では Stage 4 までの資料が混在することから、他地域との比較により、Stage 2 に帰属する例は 2 割前後と想定しておきたい。うち、口縁部外面ないし内面側が帯状に肥厚する第 4 図 22・25～27・34 の器形的特徴は矢部奥田類型、ないしは Stage 1 の里木Ⅲ式に由来すると推察されよう。ただ何故、該期に無文化が進行するのかについては、現状の南四国では原因不明とせざるを得ない。このほか第 4 図 28・29 等に示される直口、ないしは外反の素口縁深鉢が少量認められる。うち 28 の口唇部には連続した二枚貝腹縁圧痕による刺突が窺えるが、その出自もまた、厳密には明らかにできない。これら深鉢の器面調整は横位の二枚貝条痕を主体としている。

後期初頭の Stage 3～4 についても一括事例には恵まれない。しかし高知市柳田遺跡 (森田ほか編1994) の成果から、新相の Stage 4 段階については、無文系を含めたセット関係が一応想定できる。まず有文では、磨消縄文系が深鉢中の 69.0% と圧倒的比率をもって定着している (第 4 図 35～47)。Stage 2 で盛行した沈線文系は、逆に



写真 2 中期的特徴を色濃く残す
Stage 2 在来の沈線文系土器
(林田シタノヰ遺跡出土 / 香美市蔵 / 筆者撮影)



第5図 Stage 5~7の様相

(1~5・8・9・11~13・15~18・21・22・24・25宿毛市宿毛、6四万十町大宮・宮崎第2地点、7・19・20四万十町神ノ西 TP 第Ⅱ層、10・14・23本山町松ノ木V次出土)

6.9%と急減しており、一転、有文精製主勢の構成を示すようになる(第4図48)。この傾向は後続の宿毛式期にも通じており、何らかの要因により Stage 3~4の間で沈線文系が減少に転じたと理解できる。

無文系深鉢の組成率もまた24.1%と低調である。第4図の50・51・53に掲げた大型口縁部片がその具体事例である。何れも口唇部を刻まない面取平縁のM類型である。一見、砲弾形を呈するようにも見えるが、口辺部は、緩やかな内湾成形が保たれており、かつ頸胴部片52・54では強い屈曲部が備わっていることから、屈曲形I-1-②形が主体と推認できよう(幸泉2017p60)。なお同器形は、該期中・四国~関西圏で広く通底したタイプでもある。かつて木村は四万十市三里遺跡例をもとに、該期無文系深鉢について「必ずといってよいほど口縁端に彫りの深い端正な刻目が入っている」と評していたが(木村1983p135)、今日では、既に論拠を失ってしよう。

深鉢・鉢の器面は、内外面ともに横位の明瞭な二枚貝条痕を底部にまで流す個体が多く、巻貝条痕も少数認められるようになるものの、瀬戸内側とは異なった中期由来の製作技法を主体的に備えている(第4図50~56)。成形は内傾接合が原則である。うち第4図23のように器形を内折させるような部位では、意図的に外傾接合を採り入れる場合もある。底部側面は外面のやや端反る外観が特徴的で、平底(第4図30・31)と、微隆帯による高台底(第4図32・33)の2者で構成される。

(2) 後期前葉 1 ; Stage 5～7の様相

Stage 5～7、宿毛式段階の纏まった事例としては、宿毛貝塚のほか、本山町松ノ木遺跡IV次SK40古相（出原・前田編1996）や同土器捨場状遺構（前田編2000）、四万十町（旧窪川町）川口遺跡（吉岡編2004）、根々崎五反地遺跡IN区TP49包含層（吉岡編2004）、大宮・宮崎遺跡第2地点等が挙げられる。

学史上、広く西日本の縄文土器研究史に影響を与えてきた宿毛式土器であるが、意外にも、南四国域では Stage 5～7 各期の一括資料には恵まれていない。従って、詳細なセット関係も未だ明らかにし得ないのが現状である。

第5図には該期の代表例を示した。磨消縄文系では横位連繫・重畳を繰り返す中津Ⅱ式以来の杵状区画構成を崩さず、要所に、大振りの「O」字文や鍵形文による文様集約部をみるなど、明確な在地色が加わるほか（第5図1～3ほか）、既に筆者が整理してきたように、刻目素文系が磨消縄文系と折衷するかたちで台頭してくる（幸泉2008c・2012ほか）。第5図4・5は、筆者が刻目素文系B群1ab類系の典型としたタイプである。本シリーズの続篇でも紹介するように、何れも、東九州側との関係性が深い。この刻目素文系B群1類系は刻目文様帯の競り上がりにより、第5図4・5→6・7・10→第7図1～4に至るセーリエが成り立つ。すなわち、後述の Stage 8、松ノ木式段階で広く通有となる口唇部「ブラシ状文」の起源が、当該宿毛式分布圏内の刻目素文B群に求められるということである（幸泉2008cほか）。Stage 8、縁帯文成立期深鉢の広域ネットワーク化と深鉢粗製化の背景を探るうえで、実に興味深い現象といえるだろう。

伴出の沈線文系は、周辺地域と同様、さらに減少傾向にある。該期では磨消縄文系に準じた幾何学的な区画意匠や、多条の弧線文を展開するタイプが極少量散見されるに過ぎない（第5図8・9・11～14・16）。

無文系深鉢については、個々の事例から、口唇部を若干肥厚させる個体が出現するとともに、口唇上をヘラ等で刻むK類型が数割程度を占めると予想される（第5図17・18）。器面は瀬戸内方面と同様、二枚貝条痕が姿を消し、巻貝条痕後ナデで仕上げる例が急増する。底部についても詳細は不明瞭であるが、宿毛貝塚や四万十町神ノ西遺跡等の例から、

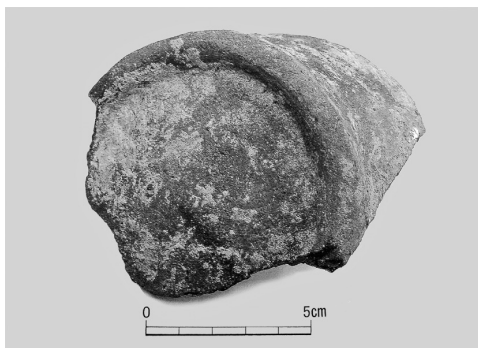
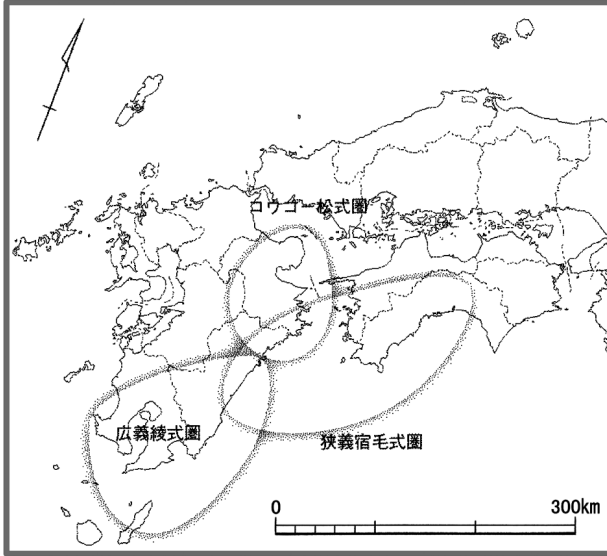


写真3 幡多地域における Stage 5～7 段階の深鉢底部形態（宿毛貝塚出土 / 宿毛市立宿毛歴史館蔵 / 筆者撮影）



第6図 Stage 5～7 狭義宿毛式土器の分布範囲
(幸泉2008c より一部転載)

外縁に低い隆帯を設けた高台底が主体を占めるとみてよいだろう(第5図19～21、写真3)。同様に、隣接する東九州域のコウゴウ松式圏や、南九州綾式圏の一部でも高台底が主勢を成しており、該期では、豊後水道を介し類縁した小地域圏が割拠していたと捉えられるのである(幸泉2008c; 第6図)。

浅鉢については、精製有文として中華ナベ形や皿形の中大型例が該期に増大する(第5

図22～25)。磨消縄文や刻目帯意匠は深鉢に準ずるもので、無文帯の幅が広い点に特徴が見出せよう(幸泉2009d)。なお、精製鉢形や皿形浅鉢で、頸部内縁に鋭い稜線を伴うのは、この時期の特徴と考えられる。

第1表 Stage 8 併行期の個体数調査結果 (文様系統・深鉢)

府県	遺跡名・地点等	時期幅	有文							無文		個体数	
			磨消縄文系	沈線縄文系	沈線文系	刻目素文系	刻目フラス	その他	白陶縄文系	素文	K類型		M類型
高知県	松ノ木 I 次土器捨場状	松ノ木主	14.8%	0.7%	1.4%	1.4%	37.3%	2.8%	0%	0%	21.8%	19.7%	142
	松ノ木 V 次土器捨場状	松ノ木主	18.6%	1.6%	1.5%	0.9%	36.8%	0%	0.3%	0%	16.7%	21.4%	318
(参) 徳島県	荒川 3区集申地点	松ノ木併	0%	0%	0%	0%	52.9%	0%	0%	0%	3.9%	43.1%	51
	荒川 3区包含層	松ノ木併主	11.5%	1.2%	1.6%	0.5%	23.4%	0.3%	0.5%	0%	5.0%	55.9%	1183
(参) 愛媛県	鶴来が元包含層	松ノ木併主	4.1%	0.2%	1.7%	0.7%	8.0%	0%	0.1%	0%	24.5%	58.7%	1496
	辻堂包含層	なつめの木併主	1.4%	0%	5.9%	3.2%	4.3%	0%	0%	0%	50.5%	34.6%	555

※1 有文「その他」として関東圏之内系、九州鐘崎系、市来系、出水系を、素文系として条線文類型、金網文類型を一括した。

※2 沈線刻等によるフラス状文のみの例は広義の刻目素文系に含むべきであるが、脚部意匠が各文様系統と相違する再編期を象徴するため、特に「刻目フラス」と表現した。

※3 仮称「辻堂式」は上面施文型、前面施文型とも刻目素文系フラス状文(刻目フラス)に仮配分した。小片資料に配慮した結果である。

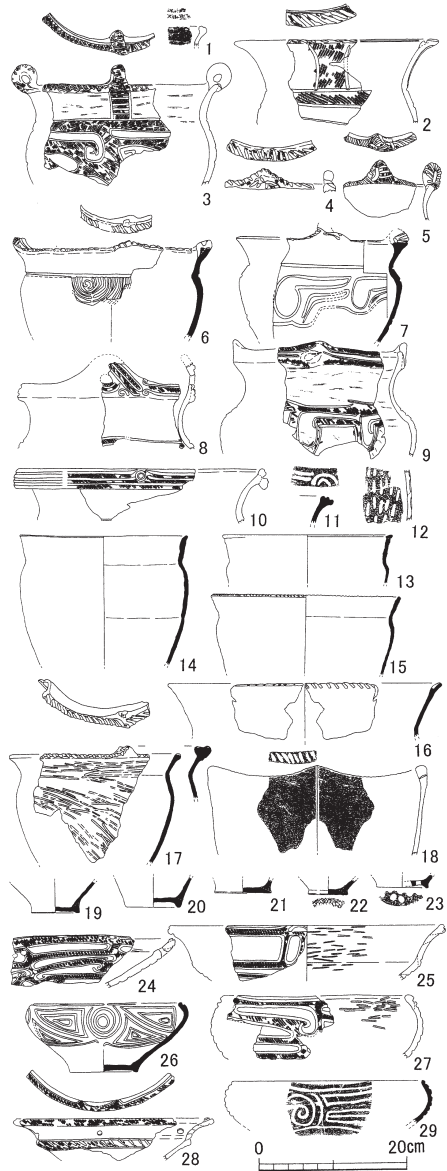
※4 組成比30%以上の数値にはアミカケを施し、強調した。

(3) 後期前葉 2 ; Stage 8 の様相

既に触れてきたように、該期については、本山町の松ノ木遺跡発見により認識が一変した(出原編1992・1993、前田1994・2000ほか)。なかでも当該遺跡のI次、V次調査で検出された一連の土器捨場状遺構からは、Stage 8古相を主体とする膨大な縄文土器資料が一括で得られており、特に、西日本ではその資料的価値が極めて高い。このStage 8に属する事例としては、他に四万十町川口遺跡、根々崎五反地遺跡、宿毛市宿毛貝塚(山本・廣田編1986・前田1994ほか)、四万十市三里遺跡(岡本ほか編1978、木村1983ほか、川村編2008ほか)、大宮・宮崎遺跡第2地点の新相資料(木村編2000)、土佐清水市片粕遺跡(岡本ほか編1975)等が挙げられよう。

もっとも、全国的に著名となった松ノ木遺跡の一括資料群でさえ、伴出の無文系土器群については、その大部分が未報告のまま、死蔵されてきたのが実状である。筆者は、その資料学的価値を再発掘するため、去る2001年に本山町教育委員会の許可を得て、全資料群の個体数識別計量調査を実施している。第1表にその成果を纏めた。併せて同表では、先の幸泉2014a稿で発表した徳島県と愛媛県のStage 8の事例に、最新の辻堂遺跡(中野・重松編2013)の成果を加味し、再編してある。

第1表によると、南四国における無



第7図 Stage 8の様相

(1 宿毛市宿毛、2~5・8~10・12・18・24・25・27・28本山町松ノ木V次、6・7・11・13~17・19~23・26・29松ノ木I次出土)

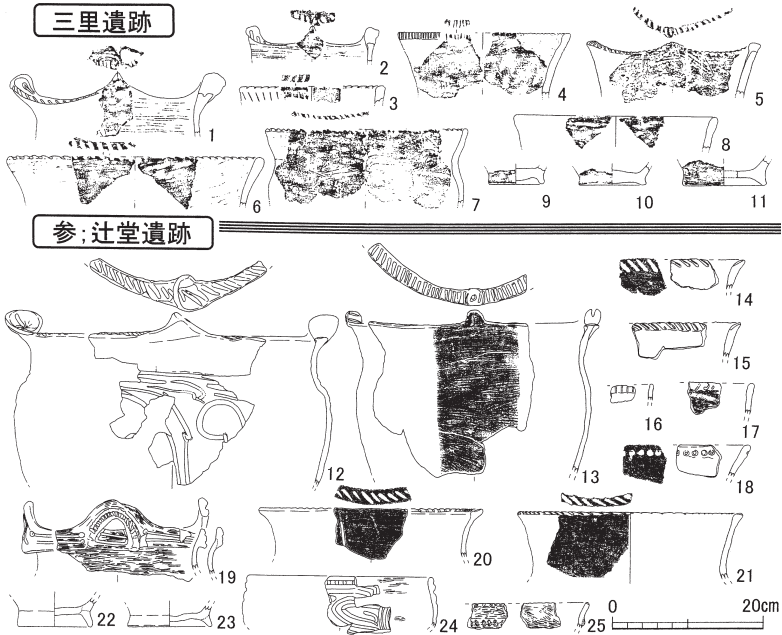
文系深鉢の比率は相対的に低く、4割前後であることが把握できる。先の第一篇、東南四国域よりもさらに割合が低いことが解るだろう。うち、口唇を刻むK類型が半数前後を占める点は、西部瀬戸内や九州側に通ずる特徴である。後述するように、これには口唇部をブラシ状文で加飾する頸胴部無文の深鉢（第7図17）が少量含まれるとみられる。

つづいて、個々の文様系統の特徴に触れておきたい。まず有文深鉢であるが、縁帯文期に向けて原則、口・頸・胴「三帯分離の原則」が貫かれ、かつ頸部が無文化する。口唇上にはブラシ状文が独立して描かれるが、うち第7図1～5のように縄文地となる個体は、前段の宿毛式にみる刻目素文B-1類型を継承するもので、厳密にはStage 8古相と捉えるべきであろう（写真4）。胴部には在地由来の磨消縄文が描かれるが、帯状意匠となる例はむしろ稀で、南四国では3のように独立区画内をナデ消す手法が多い。つづくStage 8中相の最盛期には口唇部から縄文が失われ、胴部には東方由来の上弦弧状文（第7図6）や西部瀬戸内に多い沈線文（第7図7）など、周辺他地域からの影響が如実に現れはじめる。すなわち、視覚性の最も強い口唇部には西日本広域でほぼ共有化された無文地のブラシ状文が、対する胴部文様帯は規制が比較的寛容で、幾つかの小地域に由来する個性的意匠の施文が許されたと認識できるのである。こうした流儀は、口縁部文様帯が外面施文型へと転換するStage 8新相（第7図8～10）でも同様であって、9のように、胴部には松ノ木式在来の磨消縄文系列が依然継承されるのである。このほか外来系として第7図11に掲げる東九州由来の橋詰式が少数、さらに列点文を付す北陸地方、三十稲葉式との関係が想起される第7図12のような土器も極少量認められる。もっとも、後者の列点文は口唇部ブラシ状文とセットで胴部にのみ採用されており、北陸方面からの直接搬入を示すものではない²⁾。



写真4 Stage 8古相の縄文地ブラシ状文
（松ノ木遺跡出土 / 本山町蔵 / 筆者撮影）

伴出の浅鉢では、松ノ木遺跡検出の土器捨場状遺構で第Ⅰ次調査区と第Ⅴ次調査区の内容に差異が内在する点を見逃さない。既に筆者が別稿で論じているが、第7図24・25・27のような二条縄文帯の重畳による例は、第Ⅴ次調査区側に偏在する（幸泉2008d）。これらは宿毛式からの系譜が辿れるもので、Stage 8でも古相、縄文地ブラ



第8図 Stage 8 新相の粗製土器群
(上段：四万十市三里遺跡、下段：今治市辻堂遺跡出土)

シ状文の深鉢とセットを成そう。対する第7図26・29のような集約沈線文系統の精製浅鉢は、型式設定以来、松ノ木式の代名詞のように語られる例が多いものの、実は東方由来が契機であり、堀之内式分布圏で類例を散見できる。器面は丁寧な磨かれる場合が多く、太く明瞭な同心円文や渦巻文を主文に、多重の方形、三角形状区画文で構成されるのが特徴である。第7図27からの変容だけでは説明が付かないことから、概ね Stage 8 中相段階における外来影響が潜在するとみてよいだろう。

無文系深鉢のうち、K 類型では第7図16・17のように口唇部上面、または内縁を著しく肥厚させ、そこに有文深鉢の象徴ともいえるブラシ状文や、右斜下方向の斜行刻（以下、R 刻）を施すタイプが散見される一方、第7図15のように素口縁の無肥厚口唇部に、同じく R 刻等を付す一群が認められる。前者は、厳密には有文と無文の狭間に位置するもので、解釈をめぐっては意見の分かれるところであろう³⁾。けれども、中期末～後期初頭からの一貫した系列関係を思料するならば、無文系統のセーリエを基軸に、有文粗製化の流れのなかで派生的に生成したタイプと捉えるのが妥当であろう。さらに、これら K 類型とは別に、口唇部を刻まない M 類型も継承されてい



写真5 ブラシ状文の崩壊
 (今治市辻堂遺跡出土 / 愛媛県教委蔵 / 筆者撮影)

る。ただし第1表に示す通り、その組成比は2割程度であって、隣接する東南四国や、西部瀬戸内（第1表の徳島県荒川遺跡や愛媛県鶴来が元遺跡・辻堂遺跡）と比較すれば、明らかに低率といえるだろう。これら無文系深鉢の器形は頸胴部屈曲形を基本としており、幸泉2017稿でいうところのI-1-④・⑧・⑨形や、I-3-⑤・⑦形を採る個体が大半を占める。成形は原則として内傾接合、底部は、H状を成す高台底が約7割と主体を成す（第7図19・20）。同時に、東南四国由来とみられる平底が2割前後（第7図21）、また南九州由来の可能性が高い網代底（第7図22）が極少量流入している。

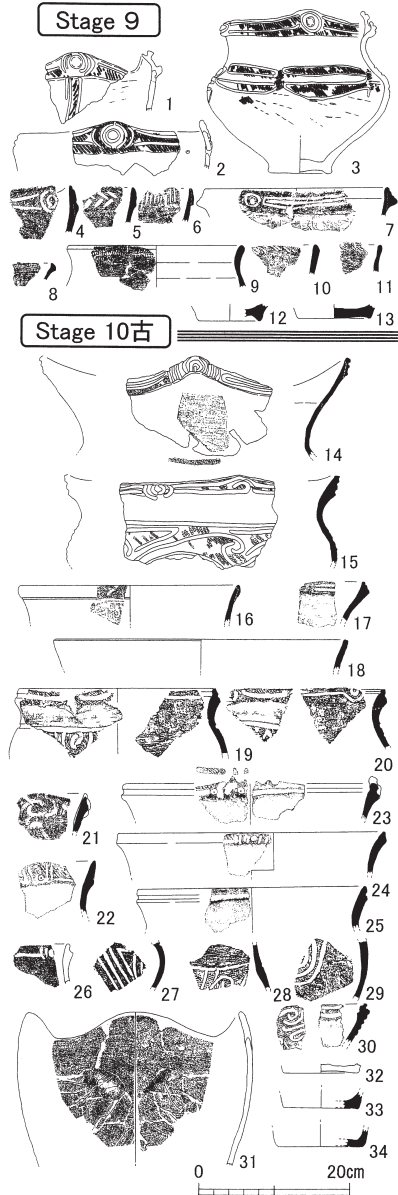
ちなみに第8図上段は、かつて木村が「三里式粗製土器」として紹介した深鉢群である（木村1983p159-161・1984p124-134）。先の検証から、第8図1・2はStage 8新相段階への帰属が想定できる。ここで注目されるのが4の口縁部外面における縦位刻目の並列施文、および7や、写真1の口唇上に付される巻貝押捺刻の存在である。当該シリーズの第三弾以降でも何れ詳述することになろうが、南太平洋～豊後水道、周防灘沿岸を介した東・南九州周辺域で特徴的な文様系統であり、西側との連絡を窺わせる事例である。さらに、かつて木村が瀬戸内の彦崎 K1式併行の論拠として注視した、口唇上面に単純 R 刻を付す一群も多数見受けられる（第8図5～7）。しかしこれらの評価もまた、長らく保留されたままであった。

近年、西部瀬戸内側の今治市辻堂遺跡で、ようやく、これらの謎を解く纏まった新資料群が、膨大に検出された（第8図下段）。そもそも、縁帯文成立期の新相段階では西日本各地で広くブラシ状文が衰退し、代わって、対向連弧文や円文を主文に、横走沈線や横長区画文といった従文で繋ぐ、プレ津雲 A 式的な意匠が台頭してくる（中四国縄文研究会愛媛実行委員会編2012）。そして西部瀬戸内では第8図下段の今治市辻堂資料群にみるように、ブラシ状文から横走沈線のみが失われた斜行 R 刻が、比較的幅広に連続して押し引施文される変異型パターンとして継承されていることが、新たに判明したのである（写真5）。かつて木村が彦崎 K1式との関係性を指摘した三

里遺跡の粗製深鉢群も、実は、この辻堂資料群と類縁した特徴を備えていると判断するのが妥当であり、東四国側で展開しはじめる「なつめの木式」とは異なった、西四国側の土器型式群と評価できるものと筆者は考えている(仮称、辻堂式)。仔細は別稿に委ねたいが、この辻堂式では、口唇部を刻む無文系K類型が50.5%と高比率を示す一方、口唇部も無文とする無文系M類型が34.6%と高い数値を示している(第1表)。かつての木村による指摘通り、対する三里遺跡ではM類型が極端に少ないことで知られる(第8図8)。つまり無文系深鉢に関していえば、西北四国と西南四国との間で、さらなる小地域差が存在することになるのである。

(4) 後期前葉3 ; Stage 9 ~ 10古の様相

Stage 9 ~ 10古相、初期縁帯文段階へと議論を移そう。Stage 9に相当する事例は再び断片的となり、良好な一括資料を欠く。現状で、先の松ノ木遺跡I・V次土器捨場状遺構最新相の一群や、高知市西分増井遺跡I A・I



第9図 Stage 9 ~ 10古相の様相
 (1~3 本山町松ノ木V次、4~13津野町北川、14~16・18高知市西分増井I A・B区、17・21・30・33・34 四万十市国見Ⅱ区、19・20・27~29土佐清水市片箱、22~25国見Ⅲ区、26・31・32 四万十町小ノ田カミヒラ出土)

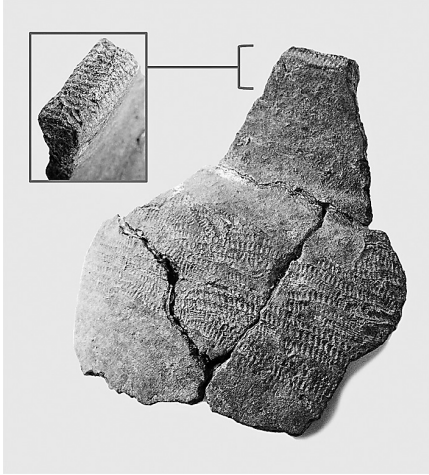


写真6 東九州の貝殻擬縄文による
口胴縄文系土器
(大分市小池原貝塚下層出土 / 別府大学附属
博物館蔵 / 筆者撮影)

B区(出原編2004)、津野町(旧東津野村)北川遺跡(山崎編1995)、土佐清水市片粕遺跡、小ノ田カミヒラ遺跡(酒井編2004)、四万十市踊婆山遺跡(木村1987)、国見遺跡(曾我編1994)、三里遺跡(川村編2008ほか)等出土の一部資料が挙げられる程度である(第9図上段)。

第9図1～7は有文の外面施文型緑帯文深鉢である。口縁部が屈曲形を成す1～3は、製作技術面からも前段のStage 8新相を直接継承するものであり、瀬戸内の津雲A1式(幸泉2014b)に併行しよう。これに対して、外面貼付型(いわゆる膨隆口縁)となる4～7は相対的に新しく、同じく瀬戸内の津雲A2式併行に措定できる(幸泉2014b)。口胴縄文系はまだ極少量に過ぎないが、既に筆者が指

摘する通り、確実にセット関係を成して展開している(幸泉2009b:第9図8～10)。うち9・10のように口縁部を肥厚させない例が主体を占めるのは、南四国域の特徴であろう。8・9は巻貝擬似縄文の事例である。該期粗製深鉢の器面調整で通有たるヘナタリ属巻貝を施文具に応用させるもので、やはり東九州側との連絡が指摘される。やや前後するが、東九州の大分市小池原貝塚(賀川・橋1967)の事例が著名であり(写真6)、ここでも、製作者による粗製素文レベルに対する製作意識の共通性が垣間見れよう。

Stage 9段階の無文系深鉢については、未だセット関係が不明瞭である。これは絶対量の不足、すなわち、そもそもの低比率も反映していよう。前段との絡みから、口唇部を刻むK類型を中心に2割前後の存続が予想される(第9図11等)。成形法も将来に向けた課題とせざるを得ないが、うち底部については前後型式から、退嬰化した低いH状高台底が主体を成す可能性が考えられよう(第9図12・13)。

第9図下段はStage 10古相、津雲A3～A4式併行期(幸泉2014b)である。14・15は高知市西分増井遺跡IA・IB区出土で、萎縮化した膨隆口縁には、依然として弧文と横走縦線の組合せが維持されることから、津雲A3式併行とみてよい(写真7)。

第9図16は伴出の口胴縄文系で、前段とは一転、口縁部外面に比較的幅広の膨隆貼付口縁を設け、そこに単節RL縄文を密に施すようになる。筆者の口胴縄文系1期に

相当する(幸泉2009b)。有文精製たる14・15の年代観とも矛盾しないだろう。

第9図18は、Stage10古相では数少ない無文系深鉢の事例である。直口外傾の素口縁で、外面は肥厚しない。内外に条痕は認められず、ナデにより仕上げられている。

第9図19～29は片粕遺跡、国見遺跡Ⅱ・Ⅲ区、ならびに小ノ田カミヒラ遺跡出土の津雲A4式併行期に属する土器群であ

る。口縁部文様帯の萎縮化が一層進行することで、主文は、短小な対向弧文や縦位刻目文、重弧文等に、また従文は一条の横走沈線にまで変異する。口胴縄文系が一定量を占めるとみられるが、確実なセット関係を示す事例は今のところ見当たらない。無文系では、数少ない事例として第9図31の砲弾形深鉢が挙げられよう。口縁が強く内弯する例は津雲A4式の標式である愛媛県文京遺跡第11次調査区第5層(宮本編1990)等でも出土が確認されており、該期の四国地方周辺で広く認められるタイプである。

成形は、原則全て内傾接合による。深鉢・鉢底部は平底を主体とし、中央が緩く凹む平底Ⅱ類、または凹底と高台底を少量伴う組成と推定されよう(第9図32～34)。

(5) 後期前葉4～中葉1；Stage10新～12古の様相

Stage10新相は、東九州側より小池原上層式由来の土器群が流入してくる段階である(第10図上段)。該期の比較的纏まった事例として、南国市田村遺跡群J3区(吉成編2004)、宿毛市宿毛貝塚、土佐清水市片粕遺跡、大月町尻貝遺跡(前田編1991・坂本編2007)等が挙げられる。

第10図1～9・12は精製の磨消縄文系深鉢である。組成比は不明であるが、隣接する豊後水道沿岸域の様相から西南四国では過半数以上、また高知平野周辺域でも一定の割合を占めると推察される。

伴出の瀬戸内由来深鉢としては、第10図10に示す彦崎K1式系統と、素文の口胴縄文系統が挙げられる。うち前者は、隣接する東四国側とは異なって、典型例は極めて乏しい。10は無文の例で、厳密には彦崎K1式とは呼べないが、口縁端部の形態から彦崎K1式古～中段階(幸泉2016)の影響を受けていることが明らかである。これら

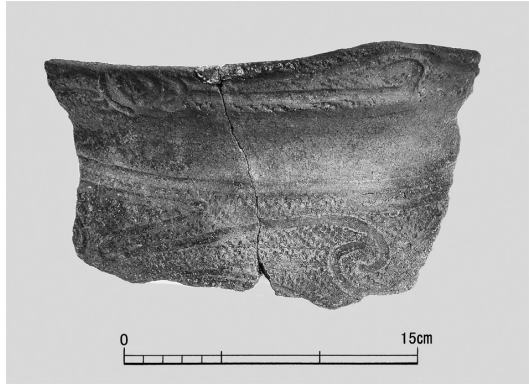


写真7 小池原上層式成立期に關与する土器
(高知市西分増井遺跡出土 / 高知県埋文蔵 / 筆者撮影)



第10図 南四国域における Stage10新~12古相の様相

(1~3・7・28宿毛市宿毛、4・5・9・11・12・14南国市田村J区、6・8・18・25~27・29・33大月町尻貝I次、10・13尻貝II次、15~17・19~24・30~32・34~38・41・44・45・46・47田村H2区包、39・40・42・43田村H4区包出土)

の存在から、小池原上層式との併行関係を推し量ることもできる。また、後者の口胴縄文系も、現時点では確実視できる個体が少ない。このことは、東九州側でも同様であろう。そもそも瀬戸内側とは異なって、組成比上の割合が少ないのである。第10図14は全縄文の鉢である。既に筆者が指摘する通り、該期に極少量の全縄文土器が東方より流入しており、第二次磨消縄文系波及の背景を探るうえで興味深い資料といえるだろう（写真8）。

無文系深鉢は前段と同様、数が少ない。さらに第10図10のような有文模倣形を除くならば、素口縁の無文系土器は極めて少ないことが解る（第10図11）。完形資料に恵まれない現状では想定域を越えないが、器面調整にはミガキ等を伴う精製事例が多いことから、器種的には、鉢形を主体とする可能性が考えられよう。そうすると、無文系深鉢は外来搬入資料を除いて皆無という可能性も出てくるのだが、断定は、今後の良好な一括資料を待つてからにしたい。

製作技法もまた、現状では不明瞭な点が多い。成形法は内傾接合、深鉢・鉢底部は、尻貝遺跡の事例から西南四国側では東九州由来の平底が多く、これに低平な高台底が一定量伴う組成が想定される（第10図13・14）。

第10図下段は Stage11～12古相、鐘崎Ⅱ・Ⅲ式併行期の事例である。南四国全域で遺跡数が増大し、再び資料が充実化する。該期を代表する事例としては南国市田村遺跡群 H 区ほか、四万十市（旧西土佐村）大宮・宮崎遺跡、大月町尻貝遺跡等が挙げられよう。

もっとも、有文の鐘崎Ⅱ・Ⅲ系で深鉢形を呈する個体は、高知平野周辺では稀である。南国市田村遺跡群の諸例から、大半が鉢形のみへと転換している様子を看取できるだろう（第10図34～43）。これは、西南四国側（X圏）との根本的なセット関係の違いであり、注目に値する（第10図25～30）。南四国中央部（IX圏）の深鉢で主勢を成すのは、第10図17～21に示される口胴縄文系であり、その組成比は5～7割にまで達する。該期で口胴縄文系が主勢を成すのは北方の中部瀬戸内、備讃瀬戸地域沿岸域であり、南四国中央部では、東九州と瀬戸内の両方面との交渉を意識した文様系統組成を構築していたと捉えられよう。

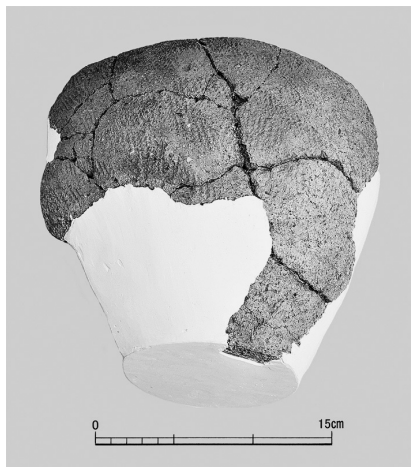


写真8 Stage10新相の全縄文鉢形土器
（南国市田村遺跡群 J1区 SK106出土 / 高知県埋文蔵 / 筆者撮影）

無文系深鉢は2割前後と、該期でもやはり少数派に過ぎない。遺存状態から口胴縄文系との識別が困難な個体もあるが、第10図22～24に示される通り、多くは口胴縄文系に準じた器形を呈している。器面はナデが一般的であり、巻貝等による貝殻条痕はこの時期、極めて少ない。ただし45のような鉢形ではミガキ、または丁寧なナデによって仕上げる例も少なくない。

成形は内傾接合を原則とする。深鉢・鉢底部は第10図31～33に示されるように、南四国全域で中型の平底が一般的である。

(6) 後期中葉2；Stage12新の様相

第11図は、Stage12新相各期の様相である。南四国域では、当該期も遺跡数が比較的安定している。広域編年網を重視する本シリーズでは、このStage12新相をさらに(1)～(3)期に細別して検討したい⁴⁾。

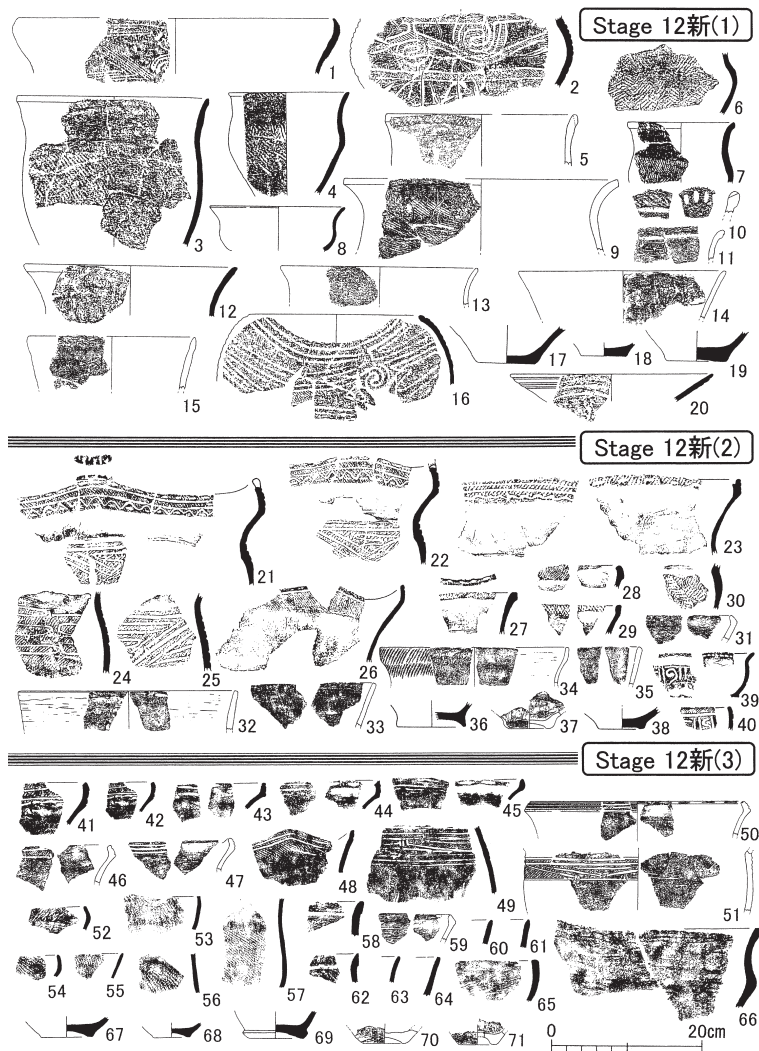
Stage12新相(1)期では、前段の鐘崎Ⅱ・Ⅲ式併行の土器群が一気に衰退し、代わって、関西周辺を発祥とする北白川上層式3期併行の広義磨消縄文系土器群が流入してくる(第11図1・2・16)。該期を代表する事例では、高知市西分増井遺跡1次調査区(出原編1990)や南国市田村遺跡群 Loc.47(森田ほか編1986)、同M1・3・4区(吉成編2004)等を挙げることができる。

広義の磨消縄文系は関西の北白川上層式3期に類縁するものであり、前段の鐘崎Ⅱ・Ⅲ式や口胴縄文系にその系譜は求め難い。このことから、東方からの移入を想定するのが妥当であろう。田村遺跡群 Loc.47における同組成比は13.2%、対する口胴縄文系は64.5%と高比率を維持する。併行期の瀬戸内でも、津島岡大式～四元式段階を構成する有文深鉢のなかに同等の磨消縄文タイプが存在するが、その組成比は全深鉢中の僅か3%前後に過ぎず、口胴縄文系が圧倒的主勢を成す(阿部1994p264-265)。

口胴縄文系深鉢は口縁部外面の肥厚帯が退嬰化し(第11図3～5)、代わって、口唇部を外方に強く弯曲させて、そこに単節RL縄文を付したⅣ-②型(幸泉2009b)が盛行しはじめる(第11図7・9)。胴部には擬似綾杉縄文が含まれるなど(第11図6)、筆者の定義する口胴縄文系；四国3期の典型的な様相を示すようになる(幸泉2009bp5-8)。このほか、第11図9に示されるような全縄文深鉢が極少量伴う。

該期の無文系深鉢もまた前段と同様、組成比は2割前後に過ぎない。田村遺跡群 Loc.47の組成比は22.4%である。口胴縄文系に準じた緩屈曲外反口縁Ⅰ-2-⑧形(第11図11～14；幸泉2017p60)に加え、僅かながら、直口砲弾形深鉢も認められるようになる(第11図15)。

成形は内傾接合ばかりである。深鉢・鉢底部は平底を主体とするが(第11図17・18)、なかには緩凹底～凹底を呈する個体があり(第11図19等)、瀬戸内ないし東南四



第11図 南四国域における Stage12新相の様相

(1～4・6～20南国市田村 Loc.47、5 田村 M1区包、21～30・36・38～40土佐清水市片粕、31～35・37四万十市大宮・宮崎 B-1区包、41～45・48・49・52～58・60～69四万十町広瀬上層、46・47・59・70・71大宮・宮崎 C-5区包、50・51大宮・宮崎 B-5区包出土)

国側からの影響が想定される。

Stage12新相(2)期になると、東方由来の磨消縄文系は、西南四国側では東九州圏との再度の関係親密化に伴って在地色が増し、片粕式へと変容する(第11図中段)。1990年代前半までは、学界で四元式や津島岡大式等の認識を欠いていたこともあり、平城Ⅱ式からの変容とする考え方が、当時の南四国周辺では支配的であった(木村1983p439・1987p439-440ほか)。けれどもその後、西分増井遺跡第1次資料群等に代表される北白川上層式3期(桑飼下式)併行の一群が周知されるに至り、関西、東四国側からの影響が想定されるとともに、西南四国域では片粕式に変容を遂げたと解釈されるようになった(出原1993p48-49、木村1995p902-903、幸泉2010p98-100ほか)。後者では、標式となる土佐清水市片粕遺跡が最も充実しているが、ほかに四万十市(旧西土佐村)大宮・宮崎遺跡A-1・A-2区、A-5区、船戸遺跡第Ⅱ区古相(松田編1996)、津野町(旧葉山村)新土居遺跡(岡本・木村編1976)等でも、比較的纏まって出土している。

有文精製深鉢では、やや萎縮した「く」字形に屈曲する口縁部に波状文と横走沈線、そして列点文を、さらに緩やかに張る胴部上半には縄文地に逆三角形、ないし方形区画文を基調とする多重沈線文を組み合わせて幾何学的意匠を構成するもので、頸部は無文を維持する。瀬戸内側とは異なって、組成比的にも、こうした有文深鉢が圧倒的な主体を占めるようになる(木村1987p164・169ほか)。

伴出の口胴縄文系は、口縁部文様帯が内湾ないし内折するタイプが特徴的である(第11図28・29)。これらのなかには、内縁または口唇上にも縄文を施す例が多く、一部には精製有文深鉢に倣い、列点刺突を施す折衷個体も認められる(第11図27)。全

縄文深鉢(ただし小片の場合、厳密には、口辺部に幅広く単節RL縄文を押捺するタイプも含むとみられる)が引き続き極少量伴うようである(写真9)。

無文系深鉢は依然として少数派であるが、口縁が直口、外傾する素口縁の例が幾片か認められる(第11図32・33・35)。器面調整は丁寧な例が多く、貝殻条痕を伴う例は少ない。

成形は内傾接合を維持する。深鉢・鉢底部では該期に径6～



写真9 Stage12新(2)の全縄文土器
(四万十市船戸遺跡出土/高知県埋文蔵/筆者撮影)

10cm前後と、器体サイズ変動型（幸泉2009ep93）を示す高台底が再び盛行をはじめ、前段までで主勢を成した平底が激減する。

Stage12新相(3)期は、西平式併行直前の広瀬上層式が該当する（第11図最下段）。有文精製深鉢では「く」字形口縁が継承されるが、口縁、胴部文様帯ともに重畳する併行沈線文を主体とした萎縮化傾向を示すようになる（第11図41～47・50）。既に木村が指摘する通り、口縁部内縁には列点文や同外面の弛緩化した波状文を、また胴部には山形の斜行沈線を残す点において、先の片粕式の要素を各々継承すると見做してよい（第11図44・45・49～51；木村1995p903-904ほか）。さらに、僅かながらも瀬戸内の彦崎 K2 式が伴っており（第11図48）、両者のクロスデイトイングを可能としている。該期の良好な事例としては、四万十町広瀬遺跡（岡本1963）、四万十市船戸遺跡 I・II 区、大宮・宮崎遺跡 A-5区、B-4・B-5区の一部等（木村編1999）、宿毛市宿毛貝塚 TR3（山本・廣田編1986）等が挙げられよう。

伴出の口胴縄文系では、口縁を内折させる第11図52・54を確認できる。前段の(2)期からは弛緩化の方向性が指摘できよう。口辺部に広く縄文を施す53・54も、やはり前段の34と比較すると弯曲が緩やかとなる。

無文系としては第11図58～66があるが、深鉢は少なく、多くは、66のような鉢形を呈するものと考えられる。

成形は、内傾接合が原則である。深鉢・鉢底部は、該期において一気に小型凹底、ないしは小型高台凹底へと転換する（第11図67～71）。うち小型高台凹底は、東九州側でも当該期以降に主勢を成す新形態である（幸泉2002・2009e・2010）。ここでは中部瀬戸内を起源とする小型凹底を素直には享受せず、在来の高台底技法を組み入れるところに、独自色の存続が看取できるのである。

4. おわりに

以上、本稿では紙幅の都合、南四国域のうち縄文時代後期中葉、Stage12新相(3)までの様相を検証してきた。

つづく Stage13、西平式併行期以降も蓄積されてきた資料群は膨大であり、未評価部分も多い。次回もまた引き続き資料評価の乏しい粗製土器群や、昨今学界で注目されてきた無刻目突帯文、谷尻系、ならびに刻目突帯文成立期の諸問題等を中心に、諸処の検証を重ねていくことにしよう。

(つづく)

註釈

- 1) 当時、まだ大学学部生であった筆者も、出原による個体数識別調査に基づいた斬新、かつ科学的な研究姿勢に影響を受けた一人である。いわゆる「松ノ木式」の設定は、西日本の該期土器研究史上、クオリティーの高い論述のうえに成り立っており、のち、筆者等が東九州を舞台に提唱した「橋詰式」の定義付けの際の対比基準ともなっている（幸泉満夫・幸泉文子2005）。
- 2) 近年、山口県上関町の田ノ浦遺跡（谷口編2011）でも、三十稲葉式と通ずる良好な列点文土器が確認されており、該期の、広域にわたる情報交流や、文様施文原理の互換関係が垣間見れて興味深い。もっとも近年、南九州の宮崎市右葛ヶ追遺跡で該期の列点文土器が1点出土しており、注意を要するだろう（日高・久木田編2000）。詳細は続篇に譲るが、列点文そのものは南九州の後期前葉でも多用される傾向にあることから、単純に、北陸方面からの影響のみを論ずることができないためである。
- 3) この Stage 8 前後の時期は、南四国域の有文深鉢全般において粗製化の傾向が顕著となる。つまり縁帯文成立期に向けて、有文・無文をめぐる作り分け意識と、器種のセット関係の間に再編の兆しが窺われるようになるのである。
- 4) これまでの岡本や木村等の検証により、該期は、さらに3段階の細分が可能である（岡本ほか編1975、木村1983・1987・1995、出原1993、幸泉2010ほか）。

参考文献

シリーズ第二弾の後篇にて、一括掲載する予定である。

挿図表典拠

第1～3図・第1表：筆者原因。第4図：1・6・8・10・11・13・14・18・21・22・25～34松村・山本編1999、2・3吉成編2004、4・24岡本ほか編1975、5・7・12・15・16・19・20・35～37・40・41・49前田・吉成編1993、9出原編1992、17・23山崎編1993、38・43・45木村1987、39・44・46・48・50～56森田ほか編1994、42岡本ほか編1951・山本・廣田編1986・前田1994、47木村1995、第5図：1～5・8・9・11～13・15～18・21・22・24・25岡本ほか編1951・山本・廣田編1986・前田1994、6木村編2000、7・19・20吉岡編2004、10・14・23前田編2000、第6図：幸泉2008c、第7図：1岡本ほか編1951・山本・廣田編1986・前田1994、2～5・8～10・12・18・24・25・27・28前田編2000、6・7・11・13～17・19～23・26・29出原1992、第8図：1～11木村1984、12～25中野・重松編2013、第9図：1～3前田編2000、4～13山崎編1995、14～16・18出原編2004、17・21～25・30・33・34曾我編1994、19・20・27～29岡本ほか編1975、26・31・32酒井編2004、第10図：1～3・7・28岡本ほか編1951・山本・廣田編1986・前田1994、4・5・9・11・12・14吉成編2004、6・8・18・25～27・29・33前田編1991、10・13坂本編2007、15～17・19～24・30～32・34～38・41・44・45・46・47吉成編2004、39・40・42・43吉成編2004、第11図：1～4・6～20森田ほか編1986、5吉成編2004、21～30・36・38～40岡本ほか編1975、31～35・37・46・47・50・51・59・70・71木村編1999、41～45・48・49・52～58・60～69岡本1963より一部再編。写真1～9：筆者撮影・レイアウト（各許可申請済）。